

開校120周年記念式典を行いました

校長 南部 正人

11月19日に附属旭川小学校の開校120周年記念式典を行い、附小っ子の皆さんには、次のようなお話をしました。「120年前に、附属旭川小学校は近文第五尋常小学校という名前で開かれました。児童数は140名ほどの学校でした。その後、北海道旭川師範学校の附属小学校になったのは、今から90年前です。1000人近くの附小っ子が通っていました。その中で、優れた教育研究を行う学校、先生を育てる学校となりました。120年の間に、学校名も変わり、校舎が建っている場所も変わってきました。しかし、ものの少ない時代や、寒さなど大変な環境をくぐり抜け、最近では、コロナウイルスと戦いながら、確かな学びを続けてきました。その結果、卒業生が、この学校に学んだことを誇りに思い、今の附属小学校を大事にしてくれます。ここで学んでいる附小っ子の皆さんも、附属小学校を誇りに思う一人になってください。そして、この学校の歴史を築いてきた、先生方や、支え、応援して下さる様々な方々に感謝しましょう。そして、これからも深く学び続ける気持ちを伝えましょう。」この後、附小っ子の皆さんは、今後に向けて「附小っ子宣言2021」を発表しました。

さて、120周年の節目にあたり、これまでを振り返る枠組みを歴史的対話に求めました。イギリスの歴史学者のE. H. カーは『歴史とは何か』の中で「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話です。」と述べています。彼は、それまでの歴史研究が、自分の都合のより歴史を作り出すことを恐れるあまり、事実の羅列に陥っていると批判しました（受験のための丸暗記のような状態でしょうか）。そこで、現代の視点から、過去の歴史を何度も捉え直すことが、今日的な歴史的対話だと述べています。

私なりに附属小の歴史と対話した結果、附属小学校に引き継がれているのは、次の点ではないかと思いました。それは、保護者の皆様に、御自分の子供への教育だけではなく、学校として子供たちをどのように育てるのかを、ともに考えていただいていた点です。何か大きな課題が学校に降りかかったときに、附小っ子全員を思う姿勢が顕著に見られます。コロナ禍でもそうでした。さらに、教育実習に協力することについても御理解をいただいていた点です。本校の教育実習に御協力いただくことは、子供たちが住む地域のみならず、全道における教員の養成に協力することにつながります。この教員養成の伝統は、附属小学校の先生たちにとって、常に教員をゼロから育てることをつきつめると、学校教育の本質を見出すこととなり、本校の教育の質の向上にもつながります。そのため本校では、コロナ禍にあっても、教育実習などの教員養成プログラムを決して軽視せず、時間数の確保など、可能な限り最大限に責務を全うできました。

このような伝統がどのように形成されたのかという視点で、附属小学校の120年前からの歴史に目を通したときに次のように理解できました。「旭川における、学校教育は、与えられたものではなく、自分たちで獲得してきたものだった」と。地域の人々が、私財を提供して学校設立に尽力し、行政と協力しながら自分たちの学校をつくり、拡大し、発展させ、その後、大学の附属学校として教育の質的向上を図ってきたプロセスが読み取れます。ここに、附属小学校の原点があると考えに至りました。今後は、さらに本校の歴史との対話を深め、この北の地における教育のあり方を問い続けていきます。